

『平家物語』の頼政造形

——延慶本を中心に——

趙 文 珠

一 はじめに

治承四年（一一八〇）五月の高倉宮（以仁王）・源頼政の謀反は、その直後の遷都や、諸国源氏の蜂起の直接的な引き金となる歴史的事件であった。

『平家物語』の諸本は、この事件を頼政主導の謀反として取り上げ、一連の以仁王事件話群を形成している。つまり、ひそかに平家打倒の計画を巡らしていた頼政が以仁王を尋ね挙兵を勧めたとし、その動機を子息仲綱と宗盛との馬争いに求めている。

頼政が謀叛に関わったことは事実であったようで、『玉葉』等の当時の記録類には彼が子息たちをつれて園城寺に参籠し、以仁王に加わったことが記されている。

しかし、すでに指摘のあるように、頼政の謀反は『平家物語』の語ることは違って、以仁王主導の事件だった。^(注1)その背景に寺院勢力（特に園城寺）があったことも近年の研究で明らかになっている。^(注2)後述するが、後白河院も何らかの形で事件に関わっている。

たと見られる。

ところが、『平家物語』は事件の実態を語らず、それをもっぱら頼政の謀叛として位置付けており、諸本それぞれの構想にあわせて話を展開させている。特に、頼政記事の場合は諸本ごとにその人物造形と評価が異なっていて、検討の必要性が認められる。

以下、以仁王事件と後白河院の関係を推測し、それを踏まえて古態本の延慶本の頼政造形を考察していく。

二 頼政謀叛と後白河院

先述したように、頼政の謀反は『平家物語』の諸本の語ることは違って、以仁王主導の事件だった。

以仁王にしてみれば、弟の高倉天皇の即位により王位への可能性を捨てざるを得なくなっただうえに、治承三年のクーデタの後、知行してきた寺院や荘園まで突然没収されてしまったので、とくに平家への不満が強かったはずだ。^(注3)

ところで、清盛の好意により従三位にまでのぼった頼政^(注4)が、成功の見込みのない計画にかけて余生の安泰を投げ捨てた理由はいったいなんだったろうか。

頼政の謀反の動機については、「源氏と園城寺の關係」^(注5)、「渡辺党を中間伝達者として頼政、文覚、頼朝三者の關係」^(注6)などの推論が出されているだけで、「なにが彼をそうさせたのか、決断の瞬間における頼政の心のうちは、正直なところわからない」という村井康彦の言葉の示すように、いまだ明らかでない。

しかし、動機が何であるにせよ、頼政と以仁王とを結び付ける何かがあったはずだ。

頼政と以仁王との關係については、「そもそも以仁王と頼政とを結び付けたのは、以仁王が猶子となっていた八条院に頼政も奉仕していたという要素であろう」とする山本幸司論、「そのころ頼政は、以仁王の元服した近衛河原の大宮御所に伺候していたとあるから、この御所が両者を結び付ける場となったことが推察される」とする村井康彦論などが提起されている。

以下、両氏の論を参考にしながら頼政と以仁王の關係を考えていく。

まず、『平家物語』諸本に共通する相少納言伊長なる人物に注目してみたい。

延慶本『平家物語』の高倉宮の挙兵決意の部分を見ると、「此事いかが有べかるらむと、返々思召されけれども、少納言と申け

る人は、あこ丸の大納言宗通卿の孫、備後前司季通の子也。目出き相人にてをはしければ、時の人、相少納言とぞ申ける。其人の此宮をば、位に即給べき相をはします、天下の事不可思召放と申しかば、可然事にてこそ有らめと思食て、令旨を諸国へ思召立給にけり。」と、事の重大さにためらっていた高倉宮が相少納言とあだ名される人相見の達人伊長の進言により挙兵を決意したとある。

ここに登場する伊長という人物は、延慶本に述べられているように白河天皇の寵臣だった阿古丸大納言宗通の三男にあたる備後前司季通の子である。尊卑分脈には「相人世伝相少納言、本宗綱」とあり、はじめ宗綱といい、後に伊長と改名したことがわかる。

この伊長こと宗綱が以仁王事件に深くかかわっており、彼が以仁王をそそのかしたであろうことは、次の『玉葉』の記事から知られる。

十日(略)傳聞、所逃向南都之輩、少々擲進了、其中有相少納言宗綱云々、件男、年来好相人、彼宮、必可受国之由奉相、如此亂

逆、根源在此相欺、不可々々、(治承四年六月十日条)

また、宗綱の逮捕から五日後の六月十五日の条を見ると、「又聞相少納言宗綱、被拷問之間、申種々事等云々」とあり、宗綱の自白のことが書かれている。「種種」としか書かれてないのでその内容は知るすがないが、はばかる必要のあるものだったかも

しれない。

この宗綱の役割の重要性については既に山本幸司、梶原正昭が指摘している。

その祖母は六条頭季の娘で、その兄弟である家保の孫が高倉宮の乳母子であった六条亮大夫宗信であるから、宮ともいささか関わりがあり、また彼の従兄弟に当たる権中納言伊実の妻の父の範兼が頼政の従兄弟というわけで、頼政ともつながりがあったことが知られる。^(注)

梶原の指摘するとおり、宗綱が高倉宮とも、頼政とも「いささか関わり」のある人物だったことは疑いがない。しかし、そのいささかの関係だけで宗綱が謀叛を勧め、高齢の頼政が謀叛を決心したとは思えない。高倉宮、頼政、宗綱の三人をつよく結び付ける何かが必要なるまい。私はその人物こそ院近臣の資賢、もしくは後白河院本人ではなからうかとおもう。

さて、次の『吉記』の養和元年九月二十一日の記事には、頼政の近親である埴生盛兼の身を隠していた場所が前按察源資賢の侍の家であり、宗綱は資賢の屋敷で逮捕されたとある。

(略) 後聞、故頼政法師郎等彌太郎盛兼有嫌疑事、故三條宮之間事云々、於前按察侍家、前幕下遣武士、欲搦之間、件盛兼

自殺死、搔切咽笛又前少納言宗綱入道自前按察計被搦出云々、未曾有事也、

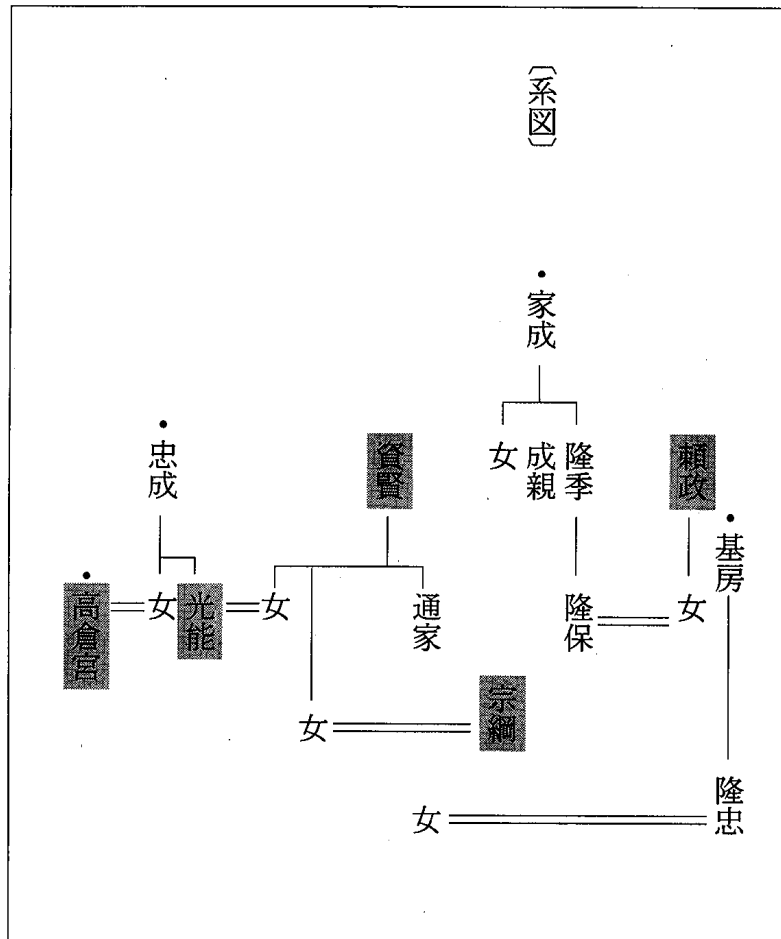
また、次の『玉葉』の記事によると、源資賢が宗綱と談義したとのうわさがあったことや、平家の追及を恐れていたこと、相少納言宗綱が資賢の婿だったことが知られる。

二十四日(略) 定能卿来、談雜事、相少納言入道、又被搦取了、是資賢卿之計、件人、一兩度来臨、因茲、兩人成談義之由、世間之人、令沙汰云々、爲恐其思、資賢卿搦出件入道、元爲資賢卿聲云々、其間、所從侍自害云々、如此之間、資賢深成恐云々、(養和元年九月二十四日条)

ところで、次の系図から知られるように、源資賢のもう一人の女婿である光能の妹は以仁王の妻であり、資賢は成親家とも、基房家とも婚姻関係で結ばれていた。また、頼政とも無縁ではなかった。

だとすると、この源資賢が以仁王事件に何らかの形で関わっていた可能性は十分に考えられる。

さて、この源資賢は保元三年に後白河院院司になってから、院の今様の師としての関係もあって院の信任を受けてきた人物で、



鹿谷事件以後は、生き残った院近臣グループのリーダーとして活躍していた。源資賢が鹿谷事件以後の院と基房の反平家行動に積極的に協調していたことは、治承三年のクーデターの際に、息子、孫まで一緒に流されていることからもうかがえよう。もちろん、流人の身にあった彼が以仁王の挙兵計画に直接参画したとは言い切れない。しかし、資賢の婿である宗綱と光能とが、以仁王事件、頼朝挙兵にそれぞれ関わっているところは留意され

る。もし、源資賢が何らかの形で挙兵計画に係わっていたとしたら、その背後に後白河院の暗黙の諒解があったことは推測されよう。

当時の後白河院が常に平家打倒の意思をもっていたことは、以仁王事件の直前の治承三、四年の政治状況からも知られる。

たとえば、治承三年十月の除目。清盛はこの年の六月に藤原基実未亡人である娘の盛子を、また八月には長男の重盛をなくしていた。加えて、平家のアキレス腱である延暦寺の内部紛争の鎮圧にも心を砕かなければならなかった。^(注9) 後白河院は、この機会をのがさず、もう一方の反平氏勢力の中心である関白藤原基房との結合をつよめて清盛に攻撃を加えた。十月の除目で、清盛の推した女婿の藤原基通をさしおいて基房の子でわずか八歳の師家を権中納言に任命し、維盛が相伝した重盛の知行国の越前国を没収した。また、盛子が管理してきた摂関家領の管理権をも握り、自分の近臣の藤原兼盛を蔵預に任命している。^(注10) これらはまさしく「上皇與關白。可令滅平家黨類之由。有密謀之由有其聞」と思われる行為であった。

次に治承四年の寺院勢力の企て。この年の三月に、寺院勢力の後白河院、高倉院奪取計画が発覚する。主導したのは園城寺だったというが、村井康彦の指摘にもあるように、院は衆徒と何らかの形で接触をしていた。^(注11) 後白河院と園城寺との結合関係は、応保二年閏二月の園城寺長使覚忠の天台座主任命、治承二年一月の園

城寺での秘密灌頂の企て、また、治承三年十一月のクーデター以後、園城寺での千日講懺悔が断絶していることなどに端的に現れている。^(注12) さらに、『寺門高僧記』の「然間平氏謀反。治承三年奉籠法皇鳥羽殿。園城衆徒殊懷悲。法皇常称智證門徒。」^(注13) という記事からも後白河院と園城寺との結束の強さは知られる。

さて、以仁王の謀反のことが明るみに出たのは、これから二ヶ月後の五月十五日であった。事件の展開はさておいて、発覚の前日の状況を『玉葉』から見ると、平家側は後白河院を鳥羽殿から京に移しており、その様子は嚴重なものだったといふ。^(注14) 以仁王の処分に先立って後白河院の出御を急いでいることから、平家側が三月の寺院勢力の企ての延長線上でこの事件を見ていることが推測されよう。

ところで、平家に身柄を拘束されることを恐れて身を隠した以仁王が向かった先は、園城寺だった。そして、以仁王事件の関係者三人（高倉宮、頼政、相少納言宗綱）はそれぞれ後白河院の近臣である資賢と繋がりを持っていた。

これらの事実は、以仁王の挙兵計画の背後に院近臣、さらには後白河院その人の意思が動いていたであろうことを語っているのではなからうか。

ところが、『平家物語』の諸本は、以仁王事件の背後の後白河院あるいは院近臣の存在は一切語らず、頼政主導の事件として話を取り上げている。

このような以仁王事件の構想は、例えば、成親の私怨にその原因を求める鹿谷事件、文覚を挙兵の示唆者とする頼朝挙兵の叙述態度と通じるものといえよう。

三 延慶本『平家物語』の頼政造形

『平家物語』の以仁王事件話群には、以仁王説話、頼政説話、信連説話を中心に、園城寺・山門関係記事、橋合戦記事などが複雑に取り入れられており、各説話はさまざまな形で諸本に扱われている。特に、頼政説話の場合は、諸本ごとにその人物造形と評価が異なっていて、検討の必要性が認められる。

今までの研究では、諸本の人物造形の把握という面より、説話の展開、変質という面からの考察が重視されてきた。^(注15)

そうした中で、延慶本の場合、頼政造形の具体的造形とはいえないが、赤松俊秀の「文武兼備の智将」、^(注16) 生形貴重の「鶴射給タリシ大將軍」像などが提示されている。

以下、これらの論を参考にしながら延慶本の頼政像について考えて行く。

さて、延慶本の頼政造形の特徴は、以仁王事件の位置付けに求められよう。

延慶本は以仁王事件の描写から、後白河院及び院近臣の存在を消去することで、頼政の謀反を成親謀叛、頼朝謀叛とは違うものとして位置付けていく。

延慶本は、鹿谷事件の発端を成親の大将争いに求めながらも、後白河院がそれを黙認していたことを明らかにし、事件が決して成親一個人の私利私欲の招来したものではなかったことを示していた。頼朝挙兵の場合も、それを後白河院の院宣によるものとし、その正当化をはかっていた。

ところが、以仁王事件の場合は、事件と後白河院の関係をまったく否定しているのだ。そのうえ、治承四年の冒頭記事に院側近の物故者の一人として生きていた資賢の名を挙げ、彼の存在そのものも消していく。つまり、延慶本は三つの反平家事件の中で以仁王事件だけを謀叛と規定し、頼政だけを反逆者として描き出しているということだ。そこに延慶本の以仁王事件の構想があるのではなからうか。

こうした構想のうえで、延慶本は以仁王事件を反逆者頼政の起こした「謀叛」として位置付け、頼政が「末代の賢王」といわれていた高倉宮を扇動していく過程を詳しく記す。

頼政は、治承四年四月十四日の夜、「御手跡などうつくしくあそばして、和漢の才秀給へる仁にてをはせしかば、位にも即ましましたらば、末代の賢王とも申べし」と人々に思われていた高倉宮を尋ね、謀反を勧める。延慶本の「頼政入道宮に謀叛申勸事付令旨事」の章段には頼政の宮を説得する過程が詳しく記されている。

頼政の説得の言葉は諸本ごとに相違が見られるが、延慶本の場

合、ほかの諸本とは異なる独自の構成をなしている。

本文の引用は省略するが、頼政は清盛の悪行を列挙したあと、「**挙義兵討逆臣、奉慰法皇之叡慮、被扱群臣之怨望、專在此時**」(第二中「頼政入道宮に謀反進事付令旨事」と、義兵を名乗り、水性火性論をもって清盛・宗盛父子に勝てると壮語する。

この頼政の義兵説は自害の場面にも示されている。延慶本の頼政は、自害の直前に、「身仕六代之賢君、齡及八旬之衰老。官位已越例祖、武略不恥等倫。為道為家、有慶無恨。偏為天下、今**挙兵**。雖亡命於此時、可留名於後世」(二中「源三位頼政自害事」と、天下のために挙兵を起こした事を繰り返して語っている。

ところが、延慶本の頼政の言説は高倉宮を説得するための高言に過ぎなかった。延慶本は頼政関連記事の最期に「源三位入道謀反之由来事」の章段を位置させ、頼政の謀叛の動機が子息仲綱への父情によるものであることを明らかにする。本文をあげよう。

抑今度の謀叛を尋れば、馬故とぞ聞えし。(略)伊豆守此事を聞て、不安事に思て、父の入道に申けるは、「心うき事にこそ候へ。さしも惜く思候馬を、宗盛が許へ遣て候へば、一門他門酒宴し候ける座敷にて、『其仲綱丸に轡はげて引出て打張』なむど申て、散々に悪口仕候なる。人にかくいはれても、世にながらへ、人に向て面を並べきか。自害をせばや」と申す。誠に志しつくしかたし。入道たのみ切たる嫡子を失

て、長らへてなにかはせむなれば、此意趣を思て、宮をも
勧め奉り、謀反をも発したりけり。誠に憤りを含むも理也」
(第二中「源三位入道謀反之由来事」)

つまり、延慶本の頼政は決して世のために憤然と立ち上がった
義兵ではなかったということだ。ちなみに、諸本の中で頼政に義
兵の言葉を語らせているのは、延慶本と盛衰記だけであり、盛衰
記は延慶本とは異なる構成をなしている。盛衰記の頼政は国のた
めに憤然と立ち上がり、壮烈に死んでいく義兵、新しい時代の予
言者にふさわしい人物として提示されている。

さて、延慶本はそのような構想のうえで、物語においての頼政
の役割を縮小していく。延慶本の頼政には義将にふさわしい姿が
準備されてはいなかった。謀叛の発覚した後の物語の展開におい
て、頼政の役割は他諸本に比べて相対的に縮小されており、延慶
本の三井寺牒状、六波羅夜討ち、宇治合戦の描写は園城寺衆徒の
活躍に重点が置かれている。

まず、三井寺牒状の部分のみよう。

頼政からの知らせで謀叛の発覚した事を知った高倉宮は、園城
寺へ逃げる。高倉宮を受け入れた園城寺では大衆僉議をし、延暦
寺と興福寺に牒状を送り、六波羅の夜討ちを断行しようとする。
この部分から、延慶本は明らかに園城寺の衆徒の役割を強調して
おり、頼政の比重は相対的に縮小される。

延慶本は、三井寺牒状の日付を五月十七日、頼政の三井寺入り
を二十日と設定することで、頼政の来るまえに、牒状が送られた
ことを明らかにする。ちなみに、源平盛衰記の場合、「様々軍の
談義評定しける中に、三位入道もうしけるは、合戦の習ひ、勢に
は依らず。謀をむねとすと申し傳へたれども、南都山門へ牒状を
遣わして、大衆を召さるべきかと宣ふ」と頼政の役割が強調され
ており、ほかの諸本にも、三井寺牒状の日付を頼政の園城寺入り
の後とする。

六波羅夜討ちの場面も同様である。延慶本は六波羅夜討ちのこ
とが大衆僉議で決められたとし、計画を園城寺主導で進めていく。
襲撃に出る人々の名乗りも「山の手へ向ふ老僧には、一能房阿闍
利心海、乗因房阿闍利慶宗、乗南房阿闍利覚勢、経修房阿闍利、
武士には源三位入道頼政を始めとして、物の用に叶げもなき老僧
五百人」(第二中「三井寺より六波羅へ寄とする事」とあるよう
に、園城寺の衆徒の名前を先に挙げる。この辺、覚一本は「大将
軍には源三位頼政」と、頼政の名前を最初に挙げており、その外
の諸本は夜討ちの計画が頼政の提案によるものと設定している。

さて、六波羅夜討ちが失敗し、戦勢の不利を判断した頼政と高
倉宮は南都の方に向かった。だが、宮の南都落ちを聞いた平家軍
が急襲したため宇治川を挟んで戦うことになる。この宇治川合戦
の描写は諸本によって少しずつ異なっているが、延慶本は、頼
政たちの奮戦ぶりよりは三井寺僧らの活躍を積極的に語っている。

この辺、長門本は頼政を中心に合戦を描いており、盛衰記の描写もまた頼政一族を中心に描かれている。

乱戦の間に、宮は落ち延び、頼政も「矢射尽し、手負うて後は、今は叶はじ」(第二中「宮南都へ落給事付宇治にて合戦事」と、南都へ向って逃げて行くが力及ばず、木津川のほうで自害を決行する。本文をあげる。

三位入道は右の膝節を射させたりけるが、木津河のはたにて高き岸の有ける隠にて、鎧ぬぎすて馬より下つつ、息つき居たりけるが、念仏百返計唱て、和歌をぞ一首読れける。

埋木の花さく事も無りしにみのなるはてぞ哀なりける
此時歌など可読とこそ覚えねども、心に好む事なれば、斯様の折もせられけるこそ哀なれ。渡辺党に長七唱と云者に、「頸うて」と被云けれども、生頸を取む事さすがにや覚けむ、「自害をせさせ給へかし」と申ければ、太刀を腹にさし当てて、うつ臥に伏たりける。(第二中「源三位入道自害事」)

頼政の最後の奮戦ぶりを強調している長門本、盛衰記などに比べると、延慶本の頼政最期の記事は簡単に物足りない感じがする。このように延慶本は頼政の活躍を決して美化して描かない。諸本に共通する頼政の勲功譚にも、延慶本のそのような叙述態度はうかがえよう。

延慶本は頼政の死後に「頼政ぬえ射る事付三位に叙せし事」の章段を位置させ、三位昇進、近衛院の時の変化退治、二条院の時の鶴退治という三つの勲功譚を記してはいるが、頼政の行動について賞賛の評語を一切語らない。そのうえ、「其時伊豆国賜はつて、子息仲綱受領になし、我身三位し、丹波の五箇庄、若狭のとう宮川知行して、さてをはすべかりし人の、由なき謀反起して、宮をも失ひ奉り、我身も亡び、子息所従に至るまで亡ぬることうたてなれ」と章段をまとめ、頼政への非難の姿勢を示す。

こうした延慶本の構想は、頼政の起こした謀反が、高倉宮の死をはじめ、遷都、戦乱と、次々に世の重大事件を巻き起したとの解釈によるものだろう。

延慶本は宮を尋ねる頼政の行動を最初から「謀叛」として規定し、「大将の子息三位に叙る事」、「前中書王事付元慎之事」、「後三条院の宮事」、「法皇の御子之事」の四つの章段を設け、頼政と以仁王の謀叛を非難していく。本文をあげる。

①「皇子にはおはしまさず」と云なして、源以光と号し奉る。

正き法皇の御子ぞかし。凡人にさへ成し奉ること心憂けれ。

頼政はゆゆしく申しかども、遠国までは云に不及、近国の者も念ぎ打上もなし。語つる山門の大衆さへ心替してしかば、

云甲斐なし。(第二中「大将の子息三位に除する事」)

②昔延喜の帝の第十六の御子、兼明親王、村上帝第八御子、具

平親王とて、二人をはせしかば、前中書王、後中書王とて、賢王聖主の御子にて、才知才芸目出度くわたらせ給しかども、王位に即せ給事は別の御事なれば、さてこそ止み給しか。されども謀反をやり給し。(第二中「前中書王事付元慎之事」)

③後三条院第三皇子、輔仁親王とて御座す。目出たき賢人にて座せしかば、(略)かかりけれども、御即位相違してければ、三の宮いかばかり本意なく被思食けれども、世の乱やは出来し。(略)此をば非職の輩、おおけなき事を思企たりけり。

今の三位入道の思立れけむは、是には似るべき事ならねども、遂に前途を不達して、宮を失ひ奉り、我身も滅ぬる事こそ、返す返すもあさましけれ(第二中「後三条院の宮事」)

④六条殿と申女房の御腹に、法皇の御子御座けるをば、兵部大夫時行後娘、故建春門院の御子に養まひらせて、(略)今年十二才にぞ成せ給ふ。かかる世の乱れなれば、御受戒の沙汰にも不及、沙弥にてぞわたらせ給ひける。風吹は木不安心地して、余所までも苦しかりけり。為身、為人、無由事引出たりける頼政哉。

つまり、延慶本は頼政の高言や(①)、彼の起こした謀叛が自分や高倉宮はもちろん、宮の子息、後白河院の御子の不幸をも招いたことを非難する一方(③・④)、頼政の謀叛を承諾した以仁王をも非難している(②・③)。

諸本の頼政の行動についての評価は様々であるが、それを謀叛とするのは延慶本・覚一本だけで、四部合戦本には「由なき事」、長門本には「あしき事」、源平盛衰記には「悪事」とだけある。いずれも批判的な言辞ではあるが、延慶本ほどつよく否定はしていない。

ところで、延慶本の「謀叛」の用例を調べてみたところ、その例は多いものの、「帝位を傾奉らむとする謀叛」(第二末「昔し将門を被追討事」)の意味に当てられている人物は、平将門、広嗣、信頼、頼政、頼朝くらいだった。もちろん、源頼朝の場合、それが後白河院宣と高倉宮の令旨とによるものであることが明らかにされているので、頼政の謀反とは異なる設定となる。つまり、延慶本は頼政の行動だけを、反逆者・朝敵の先例である平将門、広嗣の謀叛と同様に規定しているのだ。そこに、延慶本の頼政造形の構想の特色がある。

要するに、延慶本の以仁王事件は頼朝挙兵とは違う「謀叛」であり、延慶本の提示する頼政像は息子のために謀叛を起こし、「末代の賢王」を死なせた人物であるのだ。延慶本の語る頼政の姿は「鶴射給タリシ大將軍」、「文武兼備の智将」のそれとは掛け離れたものといえよう。

四 まとめ

治承四年五月に発覚した、いわゆる以仁王事件はその直後の遷

都、頼朝蜂起の直接的な引き金となる歴史的事件であった。

二で見えてきたように、以仁王事件の背後には院近臣の資賢、もしくは後白河院の存在のあったことが推測される。高齢の頼政が余生の安泰を投げ捨てた理由もそこに求められよう。

その点で、古態本の延慶本の治承四年の冒頭記事に、後白河院側近の物故者の一人として資賢の名が見えるのは興味深い。延慶本が資賢一族の描写にこだわりを持っていることを考えると、これは単なる錯誤とはいえないことを感じさせる。

ところで、『平家物語』の諸本は以仁王事件の実態についてはまったく語らず、それを頼政主導の事件として取り上げ、子息仲綱と宗盛との馬争いに動機を求める。

そのような『平家物語』の構想は、例えば、成親の私怨にその原因を求める鹿谷事件、文覚を挙兵の示唆者とする頼朝挙兵の叙述態度と通じるものといえよう。

『平家物語』の諸本はまたそれぞれの構想にあわせて、以仁王事件を位置付けていく。

以仁王事件と頼朝挙兵とを積極的に関係付けていく長門本、源平盛衰記、以仁王事件と頼朝挙兵との関連性をまったく否定する覚一本、その関連性は認めるものの「謀叛」として位置付けている延慶本と、諸本の以仁王事件の扱い方は様々である。

諸本の頼政像もまた、その位置付けによって異なっている。頼政の「謀反」を強調し、頼朝との差別化をはかる延慶本、文武兼

備の源氏の老将として描いていく長門本、頼政の非凡さを積極的に語っている源平盛衰記、頼政父子の権柄にたいする不満を示している覚一本など、それぞれの以仁王事件の構想により様々な展開を見せている。

〔注〕

注1 上横手雅敬、『平家物語の虚構と真実』（塙書房 一九八五）

村井康彦、『平家物語の世界』（徳間書店 一九七三）

注2 安田元久、『後白河上皇』（吉川弘文館 一九八六）

注3 『山槐記』治承三年十一月二十五日条「或人云、高倉宮院宮也、故高倉三位腹、知行之常興寺在九條、太政大臣信長所建立、被付天台座主明雲云々」

注4 兼実は、親が五位止まりだったので頼政の従三位任命は「珍事」だとする。〔玉葉〕治承二年十二月二十四日の条）

注5 田中文英、「後白河院政期の政治権力と権門寺院」（日本史研究五十号 一九八三）

注6 山本幸司、『頼朝の精神史』（講談社 一九九八）

注7 梶原正昭、『頼政挙兵』（武蔵野書院 一九九八）

注8 ①六月十七日〔山槐記〕

（略）子剋白川殿准母、故六條攝政室、六波羅入道大相國女、於白河亭（略）薨逝、日來重惱憔悴于入道相國被參

伊都伎島間也、

②七月二十九日〔玉葉〕

廿九、乙酉今曉、入道内府薨去云々、或説去夜云々、

③八月三日〔玉葉〕

(略) 或人云、延曆寺堂衆追討事後了云々、奉公職事光能、有夢想事云々、但是閻巷之説也、難取實説歟、

④十月三日〔山槐記〕

(略) 今日為る焼佛近江國三ヶ庄被遣官兵云々、平宰相教盛奉

仰差遣郎從等、

⑤十月十九日〔玉葉〕

(略) 傳聞追討延曆寺堂衆使、更被仰兩人、知盛、經盛等卿云々

注9 ①十月八日〔玉葉〕

(略) 今夜俄被行叙位、從三位藤師家、只一人也、上卿藤大納言云々、明日除書、可補中納言云々、生年八歳

②十一月十四日〔山槐記〕

(略) 入道大相國率數千軍兵福原上洛、被着八條亭、京師怖恐、衆口噉々、或曰、故内大臣所賜之越前國法皇召取之、大成怨、又白河殿庄園法皇又有御沙汰、又除目間被據等不甘心云々

注10 『百鍊抄』治承三年十一月十五日之条

注11 『平家物語の虚構と真実』、前掲書

注12 『山槐記』治承四年十二月十六日の条「自今日一院御方

如先々被行千日御講、權大僧都澄憲為御導師、御懺法衆三人被召云々、去年十一月以來斷絶」

注13 『寺門高僧記』 続群書類從二十八輯上

注14 『玉葉』治承四年三月十七日条「(略) 入夜、藏人左衛門權佐光長來語云、御幸延引事、昨日申刻依有可示之事向大理第、以件人説始所承也、園城寺大衆發起相語延曆寺及南都衆徒、參法皇及上皇宮、可奉盜出兩主之由、去八

日成評議、(略) 此事法皇自被仰遣前幕下之許、仍為實説云々者、此事偏天狗之所也、佛法王法滅盡了歟」

注15 賴政説話の原態を文武兼備の武將、智將と想定する赤松俊秀論 (「賴政説話について(上) (下) — 平家物語原本

についての統論 —」(「文学」 七二・七、八)、信連合戦の成長を宮物語との関係で考察した青木淑子論 (「信連合戦の成長について — 延慶本平家物語を中心に —」(軍記と語り物) 七二・二)、渡辺党の存在に注目し、橋合戦の伝承構造を把握した谷口広之論 (「橋合戦の伝承構造 — 渡辺党と軍語り」(「同志社国文学」 八八・六) などがある。

注16 赤松俊秀、「賴政説話について(下) — 平家物語の原本についての統論 —」(「文学」 一九七二・八)

注17 生形貴重、「平家物語以仁王・賴政事件の位置付け — 末代の賢王殺害の構造 —」(「日本文学」 一九八七・七)

注18 小林美和、「後白河院説話の周辺 — 延慶本物語における」(「伝承文学研究」 一九八八・五)